

＜今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙Ⅱ 1章8-11節＞

1 並みの大きさではない苦難を経験したパウロ。

パウロは3～11節で「苦難」について語り続けています。アジア州の中心地エフェソで受けた苦難は聖書にも記されています（使徒言行録19章、Iコリント15:32）。それらは「生きる望みさえ失い」(8)、「(神様から) 死の宣言を受けた」(9)と思わせるほどのものでした。しかしパウロがこれによって伝えたいことは苦悩ではなくむしろ喜びなのです。それはどうしてなのでしょう。

2 神様がその苦難から救い出して下さったことを喜ぶパウロ。

興味深いのは、パウロがここで喜べる理由として考えていることは、死も怖くなくなるような悟りを得たといったような抽象的なことではなく、神様が「これほど大きな死の危険から救って下さった」(10)という非常に具体的なことであり、考えようによってはご利益を得た的なことである点です。これでいいのでしょうか？

3 苦難からの救いの経験を一過性のものではないものにする！

祈禱会で詩編を読み続けて来ましたが、そこで教えられたことの一つは、聖書の神様を信じた人々は、神様が救って下さったことを喜び感謝すると共に、次の苦難もまた神様が乗り越えさせて下さると信じる者になるということです。その時、過去の経験は過去形だけでなく、現在形でも、未来形でも語られるものになって行くのです（8日に読んだ詩編120編から。CD録音あり）。パウロはここでも同じことを語っています。「神は、これほど大きな死の危険からわたしたちを救ってくださったし、また救ってくださることでしょ。これからも救ってくださるにちがいないと、わたしたちは神に希望をかけています」(10)。

4 大きな苦難は恵みに繋がる。その恵みは伝わるし、伝えられる！

よって、「苦難が自分に襲いかかることもそれから救われることも、どちらも同じ信仰を持つ者にとって慰めであり救いである」とパウロが言うのが分かります(4-7, 11)。「死者を復活させてくださる神を頼りにする」(9)は、旧約の信仰者から続く同じ深い信仰の言い表しなのです。